

ペテロの手紙第一 2 章 11-25 節

「目に見える正しさ」

～導入：正しさというものは、見ればわかる～

信仰者として私たちは、常に聖書の教えにその正しさを近づいていかなければなりません。

正しさを目指すときに落とし穴となり得るのは、理屈の上における正しさや、教理における正しさを目指してしまうことです。頭の中の世界における自分の正しさというのは、自己満足の類のものとなってしまいます。

私たち信仰者に求められるのは、そうした、理屈を言えるのかどうかといったことではなく、人柄そのものの正しさだと言えます。その人の普段の行いを見続けると分かるような、誰もが感覚のレベルで認めざるを得ない正しさで、理屈とは関係ありません。

今朝の箇所においても、そのような目に見える正しさをペテロは求めています。しかも、それは「できるといいですね」といった推奨ではなく、「やりなさい」という命令です。まずは、この世の王に対する態度、それから奴隷の主人に対する態度にその正しさが出るべきだと教えています。

その前にまずペテロは、信仰者の正しさの根源について、ひとことでまとめています。

11-12 節

**11** 愛する者たち、私は勧めます。あなたがたは旅人、寄留者なのですから、たましいに戦いを挑む肉の欲を避けなさい。

**12** 異邦人の中であって立派にふるまいなさい。そうすれば、彼らがあなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたの立派な行いを目にして、神の訪れの日に神をあがめるようになります。

～背景：信者の状況～

ペテロが手紙を送った信仰者たちは偽りの信仰を持つような人たちではなく、まだ信じて間もないにもかかわらず立派で熱心な信仰をもっていたようです。すでに、救いへの道をしっかり歩み出していて、ペテロは彼らを励ますことを目的にして書いたようです。その証拠にこの手紙においては、一度も彼らを叱っていません。

ですが、信仰者たちに苦勞がなかったわけではなく、彼らはまさに試練の真っ只中にいました。その甘くない現実の一端がこの 12 節から見えてきます。悪人呼ばわりされるような迫害が、この初期のキリスト者たちにはありました。

## ～肉との戦いとは～

ところが、ペテロからしてみれば、本当の試練はその迫害ではなく、内面的な戦いでした。もう一度11節をご覧ください。この「たましいに戦いを挑む肉の欲を避けなさい」という表現からも見て取れますが、戦いは信仰者の内面で行われているのであり、悪人呼ばわりはその内面的な戦いが表に出るきっかけでしかつたといったところでしょう。

では、この「肉の欲」とは何か。この箇所を見ると、それは人格を有しているかのようなものなので、戦いを挑んでくるようです。この「戦い」とは戦争のことであり、隙を狙って継続的に攻めてくるといったことでしょう。それに加え、それは「肉の欲」ですので「欲」と関わっていますが、この欲とはお腹が空いた時の食欲など、耐えるのが難しい欲望のことを言います。他の箇所では、この「肉」が性欲とも関わっていますが、概して耐えるのが困難な誘惑として描かれています。

そのように「肉」が表されているからか、この肉とは文字通り食欲や性欲だと考える人もいますが、私はそれとは別の立場、これが墮落後の人間のエゴのことをいう立場をとっています。ひとことでは言い表せませんが、敢えてひとこと言うのであれば、これは墮落した人間の自意識のことで、その自意識が支配する生活に戻る誘惑が強いからこそ、性欲や食欲のようだとされていると私は見えています。

墮落して神から離れた生き方をしていた頃の生活、それに戻るようにと、肉が信仰者を強力な力で誘っていて、自分のプライドを傷つける人がいればその人を攻撃する、人の言うことを聞かないでとにかく自分の都合で物事を進めようとする、人の評判ばかりを気にして振る舞う。そうした強力な自意識が支配する世界に引き戻そうと肉が戦いを挑む、そのような状況のことだと思います。

ここで覚えていただきたいのは、この肉というのは、サタンではなく、信仰者自身の一部であるということです。染みついた生き方は簡単に消えるものではなく、その人の生き方をまた支配しようとするのです。ペテロはそれを避けなさいと言っていますが、彼らが一旦そこから離れられていたからこそ、もう避けているだけでいいということのようです。

## ～ふるまい～

これは原語の文法を見ると明らかですが、肉の欲を避けた結果というのが、12節の言う「立派なふるまい」です。肉の欲から離れ続けていれば、自ずと立派なふるまいをする日常があるということです。

先にこの節の最後の「神の訪れの日には神をあがめるようになります」についてですが、「神の訪れの日」とは何か、諸説ありますが、これは悪人呼ばわりしている人が救われる日のことを言っているという説が有力です。

「日々クリスチャンたちを悪人呼ばわりしていたとしても、その思いとは別に、その人はクリスチャンのそのふるまいが正しいということに気付かされていて、その人が救われる日には、クリスチャンを正しい人に造り替える神をあがめる」ということでしょう。

### ～宣教的側面～

今朝の箇所少し前の 9 節には、クリスチャンは祭司であるということ言った上で、そのクリスチャンの使命について「あなたがたを闇の中から、ご自分の驚くべき光の中に召してくださった方の栄誉を、あなたがたが告げ知らせるため」だと言っています。

この「告げ知らせる」の部分ですが、これは「ことば」に限るべきではありません。少なくとも、この 12 節ではそれが「ふるまい」によって神の栄誉を告げ知らせるということです。「誰がどう見ても正しい人になること」、それが宣教になり得るのです。

その人のふるまいはどんな言葉よりも雄弁で、人を説得するのに有効だと言えます。「クリスチャンは嫌いだった、でもその普段のふるまいが正しく見えて、神がいることが分かった。」そういったことになり得るのです。

### ～肉の欲を避けるだけで立派～

ここで、信仰者が立派に振る舞おうとするときに立派になるのではなく、「肉の欲を避けた」結果として、立派に見えるという点を見落としてはなりません。自意識が支配する墮落後の生き方をやめるだけで、決定的にこの世の人と違うようなふるまいになるということです。

そして、その人の肉的な要素が出やすいところにおいてこそ、信仰者は試されますが、そういった場面でも肉がその人を支配しないのであれば本当に立派だと言えます。他者との衝突において肉的な衝動はとくに出ますが、中でも日常においては王の支配下におけるふるまい、そして奴隷としての振る舞いがあります。一方が圧倒的に強い関係において、期待される通りに従ってられるのか。それとも、その人の自意識が暴走して反抗するのか。まず、王との関係について。13-15 節。

### 13-15 節

**13** 人が立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、**14** あるいは、悪を行う者を罰して善を行う者をほめるために、王から遣わされた総督であっても、従いなさい。**15** 善を行って、愚かな者たちの無知な発言を封じることは、神のみこころだからです。

### ～ネロ～

歴史的な文脈を重視してこの「王」ということばを「皇帝」と訳す訳もありますが、当時の皇帝は神として崇拝の対象ともなっていて、皇帝崇拝のための神殿も存在していました。この手紙が書かれた時代におけるローマ皇帝はネロで、ネロも崇拝の対象とされていましたが、ペテロはこのネロを念頭に起き、この箇所を書いたと言っているでしょう。

このネロとは暴君として有名な人物です。ヒトラーのように危険な思想を持ったタイプではなく、気味が悪く、普通の精神ではないような人でした。たとえば、ネロはその母を殺しましたが、殺すかどうかを

悩むどころか、どう派手に殺すのかを計画していたようです。この話からだけでも、異常な精神の持ち主だったことがよく分かります。

このネロはやがてクリスチャンを標的にするようになり、ローマで火事が起きると、それがクリスチャンの仕業だと主張して迫害を強めました。それはこのペテロの手紙が書かれた前後の出来事でした。

すると、このペテロの従うようにという命令は、王が暴走し得るということを想定せずに発せられたわけではありません。その暴走を目撃したにもかかわらず、従いなさいと言っています。

その暴走をを理由にして「王に反抗しても良い条件を記した神学」のようなものを書くことはありませんでした。むしろ、このペテロの命令は、皇帝に逆らう人がいることを懸念しての結果です。

### ～権威の弁護～

14 節は、体制側に肩入れするかのように、王の良い側面を教える形で展開しています。まるで、逆らって罰せられるのであれば、それは自業自得だと言っているかのようです。

そして、畳み掛けるように、15 節でクリスチャンたちの苦悩は予期せぬ出来事ではなく、神の御心がだと教えています。「善を行う」とは王に従うことなのですが、そうすることにより迫害する人は黙るとペテロは教えています。

### ～従う～

ここで少し、この「従う」ということばについて見ておきたいと思いますが、原語においてこれは「フポタッソー」ということばですが、これは行いに焦点を置いたことばではなく、態度のことを言ったことばです。皇帝の場合であれば、いつも皇帝の命令を意識すること、皇帝と意見が合わなくても皇帝の命令を遂行したいと思いつけること、自分のほうが分かっていると思わないことです。良い子が親に向ける態度だと言ったら分かりやすいでしょうか。

### ～無知な発言を封じる～

そのように、敬意をもって、しかも従おうとする意思をもってふるまっていれば、批判する人の発言を封じることができると言われていますが、当然それは、従うしもべのような心が客観的に見て立派だからだということです。

クリスチャンだからという理由で上から目線になるのではなく、徹底してしもべであるようにと、続く16 節から 17 節も教えています。

### 16-17 節

**16** 自由な者として、しかもその自由を悪の言い訳にせず、神のしもべとして従いなさい。

**17** すべての人を敬い、兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を敬いなさい。

## ～自由の意味～

ここでいう「自由」とは、肉の欲からの自由だと考えていいでしょう。墮落していた頃の生活から解放され、それではじめて人は仕えることができるようになります。「自分のことばかり」の日々が終わったからです。

ただ、ペテロは「自由を悪の言い訳に」する人が出てくることを懸念しています。これは、「救われて肉の欲から自由になった」と「王の支配から自由となった」ことを取り違え、神以外は誰の言うことも聞く必要がないとする態度のことでしょう。ですが、ペテロはここでその論理を、ひと言で封じています。

## ～自由から敬い・恐れ・愛へ～

自由となった人の姿とは、生まれながらの姿、本来神の創った通りの姿だと見ることができます。つまり、神に反抗し、罪に陥ったことから自由となった、本来的な姿です。その姿は反抗的な姿なのではない—かえってこの17節で言われるような人のことだとここでは言われています。「すべての人を敬い、兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を敬う」。これこそが、罪から解放された人間の姿です。

この17節について二点ですが、まず、これを墮落した人がいくら行おうとしても難しいということが言えます。肉の欲、墮落した者の自意識の世界から離れて、ようやく可能になるようなことです。

もう一点は、この四つのこと、「人を敬い、兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を敬う」はすべてつながっているということです。王を敬わない人は兄弟を愛していませんし、神のことも恐れていません。言い換えますと、王に反抗するような人は神にも反抗する人で、兄弟に対してもあれこれと注文をつけるので愛することもできません。

続けて、ペテロは奴隷とその主人の関係に移ります。18節から20節。

### 18-20節

**18** しもべたちよ、敬意を込めて主人に従いなさい。善良で優しい主人だけでなく、意地悪な主人にも従いなさい。

**19** もしだれかが不当な苦しみを受けながら、神の御前における良心のゆえに悲しみに耐えるなら、それは神に喜ばれることです。

**20** 罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょう。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、それは神の御前に喜ばれることです。

## ～ローマにおける奴隷～

ここで「しもべ」と訳されているのは奴隷のことですが、まずローマ帝国における奴隷について簡単に見ておきたいと思います。

ローマ帝国では3人から6人に一人が奴隷だと言われています。ただ、アメリカでそうだったように特定の人種の人を奴隷としていたわけではなく、ローマ人も異国人も区別なく、奴隷となり得ました。奴隷になる理由は戦争の分捕りものとして、借金の返済、人に攫われて等、様々でした。

奴隷は必ずしも単純労働ばかりをしていたわけではありません。中には医者になる者、職人、先生、詩人などもいました。また、ずっと監視されながら生活していたわけではなく、自由に散歩することができました。事実、奴隷の中に教会に行く者もいました。

ただ、残酷な側面もありました。多くの主人は奴隷を恐れによって支配していました。何か主人の気に入らないことがあれば、合法的に罰することができました。逃げたのであれば、奴隷を捕獲するのを専門職とする者を雇い、捉えて罰しました。罰する時は鞭を使っていたようですが、その鞭には金属の突起が付いていて、それで背中を深く傷つけていましたそれでも言うことを聞かない奴隷は、闘技場行きか、さらに酷い場合は鉱山行きとなりました。

#### ～なぜ敬意を込めない者がいるのか～

そのような中で、主人を恐れて敬意を示さないほうが難しいと思ってしまうかもしれませんが、現実はどうでもなかったようです。18節をご覧ください。ここでペテロは「敬意を込めて主人に従いなさい」と奨めています。それは敬意がない人を想定してのことだと言えます。肉の欲、つまり自分の思い通りにしたいと思うその自意識に従った人は、信じられないほどに愚かな行動をとります。

次いで、従う相手を選んでもならないと教えられています。意地悪であっても関係ないということです。

#### ～ペテロの原則～

続く、19節から20節にかけてペテロが語る原則は単純明快です。反抗的である故に鞭打たれるのであれば、それは自業自得でしかないが、従う中で、まったく賛成できない主人の命令に従いたいと願うからこそ悲しみ、苦しみを受けるのであればそれは神に喜ばれるということです。

#### ～非対称性～

ただし、ここでは「善を行うか、悪を行うか」ではなく、「善」か「罪」かということになっていることに注目していただきたいと思います。「罪」とは肉の性質と関わりますので、これは単に主人に反抗しているということではなく、その奴隷の存在全体が肉的で、罪に支配されているということです。

また、罪人のほうは打ちたたかれると書いてあるのに対し、善を行うものは悲しむ・苦しむと書いてあることにも注目していただきたいと思います。正しい人は肉体的な苦しみと同時に精神的な苦しみも耐えるということとなりますが、意見の合わない主人に合わせることから来る悲しみのことでしょう。

いずれにしても、まったく反抗心がないような状態で苦しむことは神の評価に値すると言われている

ので、これが 1 章で言われていた試練だと見ていいでしょう。信仰が本当にあるのか、それは自分とまったく意見が異なる支配者にどのような態度を取るかに現れるということです。

しかし同時に、それは召された理由でもありました。それは偶然の苦しみではなく、キリストと同じ道を歩むようにという確かな導きの中のことなのです。21 節から 22 節

#### 21-22 節

**21** このためにこそ、あなたがたは召されました。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。

**22** キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった。

#### ～キリストの足跡～

主人のもとで苦しむ奴隷は、キリストと「似た」道ではなく、「同じ道」を歩んでいる、まさにその足跡を辿っているとペテロは主張しています。

キリストは生涯を通して、その心には罪がなく、口に欺きさえも出ない、罪的な側面がまったくない純真な姿でしたが、そのキリストと同じ歩みを私たちもすることが期待され得ています。続いて、23 節から 24 節。

#### 23-24 節

**23** ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった。

**24** キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒やされた。

#### ～ペテロの見たイエス～

直前の 22 節と、今お読みした箇所の後半に位置する 24 節はイザヤ書 53 章を転用していますが、この 23 節だけは違います。しかも、23 節だけ動詞の時制が違って、「普段からのキリストの様子」のことを言っているようです。これはペテロ個人の感想を言っていると私は考えています。つまり、数年間寝食を共にして、キリストが仲間内であっても、本当にののしり返したり、脅したりしなかった様子を見ていたペテロは、そのようなイエスの姿が本当に不思議に思っていたのでしょうか。

#### ～他者のための苦しみ～

続く 24 節は、キリストの十字架の上での苦しみは他者のためであったということを確認しています。振り返ってみますと、私たちが敵に苦しめられるとき、なかなかその敵のためを思うことや、周りの人のためにと考えることはありません。強力な自意識が働き、自分のことばかりを考えるものです。ですが、もし、私たちも、苦しみの中でさえも敵のことや、周りの人のことを思うことができたのであれば、立派なのではないでしょうか。続いて 25 節。

## 25 節

25 あなたがたは羊のようにさまよっていた。しかし今や、自分のたましいの牧者であり 監督者である方のもとに帰った。

### ～意味のない苦しみはない～

キリストの思い悩みは私たちのためでありました。こうして振り返ると、その苦しみには大いに意味があったと言えます。すると、キリストの足跡に従うのであれば、私たちの苦しみにも、同じように意味があると言えます。信仰者の苦しみは無駄にならない、必ず意味があるということ覚えておくべきでしょう。

同時に、その苦しみを経験したキリストが今も尚、牧者として、私たちが悪人呼ばわりするときに一人ひとりを導いているということも覚えておくべきでしょう。

### ～適用～

さて、本日はペテロの手紙を読んで参りましたが、最後に、現代を生きる私たちが支配する者たちに接する際、この箇所から何を学べるのかを見ていきたいと思います。

### ～従うことの大切さ～

これまで確認してきた通り、ここでは「従う」ことに絞って語られていますが、その理由は、従えるのかどうかで、肉の欲がまだあるのかどうかを試されるからではないかと私は思います。つまり、これはローマ帝国の特殊な事情を扱っているわけではなく、たましいの救いそのものと関わる事柄を扱っているのです。

ですが、現代の状況を見渡しますと、その従うことが大事だとされて来なかった、あるいは、従うことが下劣なことだと思われてきた側面がないでしょうか。

### ～注解者の態度～

これが証拠となるのかは分かりませんが、私がこの箇所について研究しているときに、不思議に思うことがありました。それは、学者がペテロの命令の意味を解説する際、その内容が、字義通りのペテロ命令の逆をすることを奨めていたように見えたということです。

王に従いなさいと命じている箇所では、そう命じられていることを一旦認めはするものの、その後に長々と、「どのような状況下では従う必要がないのか」を教え出すのです。また、奴隷についての箇所も同じで、「従いなさい」と命じていることを一旦は認めるものの、道徳に反することを主人がするのであれば反抗すべきだと言うのです。ひとことで、その言いたいことを表すのであれば「正しいことを言うて上の人を正し、それでも聞き入れてくれないのであれば罰を受け入れましょう」ということだとペテ

口の命令を読んでいるのです。

ですが、上の人を正そうと働きかけることが、本当にペテロの望むことなのでしょうか。むしろ、学者たちの言うことは、反抗する人の理屈そのものなのではないかと思うのです。権威に反抗する人は必ず、自分こそが正義が分かっていると思いついでいるものです。社会を見ても、後輩や部下を扱う際に、そういった独善的な人が一番タチが悪く、反抗的だと言えるのではないのでしょうか。

つまり、学者たちの意見を見ていると、それは世の中の考え方の延長線上の考え方ではなく、肉の欲に従った解釈に見えてしまうのです。もっと言えば、この学者たちはペテロの意図を代弁しているつもりではありますが、ペテロは実は、彼らのような反抗的な人を念頭に置き、「従いなさい」と命じていたのではないかと思うのです。

確かに、命令によってはどうしても従い切れないことがあるかもしれません。ですが、だからと言って上の人にもものを言うのではなく、どうにか従いたいという思いを持ち、主人を恐れる態度をもってギリギリのところまで従ってみせるのがクリスチャンなのではないのでしょうか。これを「どこから抵抗してもいいのか」という方向性で考えてしまいますと、抵抗を前提としていて、ベクトルが逆方向になってしまいます。

結局、どこまで従うのかはそれぞれの信仰者に委ねられていますが、現代はあまりにも簡単に為政者に対して悪く言う傾向があるのではないのでしょうか。場合によっては、上から目線の上げ足取りのようにも見えてしまいます。

そのような状況を見ると、このペテロのことばは、現代の教会が必要としていることばのように見えてきます。私たちがすべきことは、抵抗ではなく、支配者を恐れてどこまでも従うことなのです。

### ～日本の状況～

ここでもう少し日本の状況について考えてみたいと思います。まず天皇についてですが、天皇は確かに神格化されてきました。ですが、皇帝ネロもそうで、そのネロにも従うようにとペテロは命じました。ペテロは問題としないでしょう。場合によって、従うのであれば非直接的に、偶像崇拜に加担するかのようだとはいいますが、クリスチャンがローマに払った税金は、当たり前かのように、皇帝崇拜の神殿にも用いられていました。

日本の政治家に対しても文句を言う人がいますが、日本の政治家はネロと比べればかわいいものなのではないのでしょうか。ペテロはあのネロについても、この手紙でひとことも文句を言っていません。最終的にペテロはネロの下で十字架刑となったと言われていますが、おそらくペテロは、キリストと同じ道を歩み、死ぬまでひとこともネロのことで文句を言わなかったのではないかと想像します。

では、文句を言わずに従うべきなのかということになりますが、それでいいのではないのでしょうか。確

かに従うと多くの苦しみがあります。ですが、正しいことをして苦しみを受けるのであれば、それは神に喜ばれます。結局、その苦しみを解消しようとするのが問題なのではないでしょうか。

～目に見える正しさ～

私たちは、同意できない相手に支配されるとき、私たちの信仰が試されていることを覚えなければなりません。肉の欲にしたがい抵抗の道を選ぶのか、それとも肉の欲を捨てた道、敬意をもってなんとか従おうとする道を歩むのか。その、まったく文句を言わない、反抗的な態度さえも見せず、悲しみ、苦しみながら生きていく道を歩めるのか。

前者の道は自己満足の世界です。自分は正しいと理屈で主張しても、どこかみっともない側面があるものです。後者のほうの道こそが、他者の目にも正しく見える道です。そのような人のふるまいを見ると、本当にこの世の人ではないと、気付く人は気付くのではないのでしょうか。

私たちもキリストを信じたとき、その十字架に向かう姿に動かされたのではないのでしょうか。人は同じように、ふるまいに動かされるものなのです。いつまでも「理屈としては正しい」レベルに満足しているようであってはなりません。実際に人に従う態度を貫き通して見せて、誰もが見れば感覚のレベルで分かるような「目に見えるふるまいの正しさ」を目指して自分を正してかなければなりません。

「ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった。」そのキリストの道を歩むものとなりたく思うものであります。

祈り：天の父なる神様

今朝は、肉の欲から離れ、信仰に生きる者に求められることが何かを知りました。どうぞ、それぞれがまず今朝のみことばが正しかったと納得し、キリストに似た者へと変えられていきますように。

イエス・キリストの御名によりお祈りいたします。アーメン。